

## 2018年8月19日（日）「召命に基づく人生の選択」

マタイ 19:1-12（その3）

1 イエスはこの話を終えると、ガリラヤを去って、ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方に行かれた。2 すると、大ぜいの群衆がついて来たので、そこで彼らをいやされた。

3 パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているでしょうか。」4 イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、5 『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。6 それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」

7 彼らはイエスに言った。「では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。」8 イエスは彼らに言われた。「モーセは、あなたがたの心がかたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったのではありません。9 まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。」

10 弟子たちはイエスに言った。「もし妻に対する夫の立場がそんなものなら、結婚しないほうがましです。」11 しかし、イエスは言われた。「そのことばは、だれでも受け入れることができるわけではありません。ただ、それが許されている者だけができます。12 というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい。」

### 【序論】

19章の冒頭から「結婚と離婚」の問題を扱ってきましたが、当初は一回でお話しする予定でした。ところが、いざ取り組んでみますと、内容的な広がりゆえ、三回に分けざるを得なくなりました。パリサイ人から議論が吹かけられた「離婚」の問題に対し（19:3, 7）、主イエスは「結婚の本義」という観点からそれを説明なさいました（19:4-6, 8-10）。ところが、今度はその内容に衝撃を受けた弟子たちが異議を唱え、そこから「独身」というテーマに発展します（19:10-12）。独身について聖書は何を語っているのか。誰一人として独身の時期を通らない人はいません。そして、その道を貫き通す人もいます。今日はご一緒に独身者に与えられる使命・賜物について学んでまいりましょう。

## 【本論】

### 本論 1. 弟子たちの結婚観

10 節以下の内容はマタイ福音書にしかないもので、それだけ著者マタイの心に深く印象づけられた主の教えだったのでしょう。

**弟子たちはイエスに言った。「もし妻に対する夫の立場がそんなものなら、結婚しないほうがましです。」** (19:10)

元々パリサイ人と主イエスとのやりとりであったはずが、ここでは弟子たちと主イエスへと移行しています。この時点で十二弟子のうちの誰が結婚していたのかは分かっていませんが、少なくともペテロは既婚者であったことがパウロの言葉から窺えます (I コリント 9:5)。弟子たちの中に既婚者と未婚者が混在していたとしますと、主イエスの言葉の捉え方も千差万別だったことでしょう。いずれにしても、「もし妻に対する夫の立場がそんなものなら、結婚しないほうがましです」という言葉は、弟子たち全員が共通して持った意識だと思われます。彼らの結婚観は当時のユダヤ人の一般的な結婚観と何ら変わらなかった。パリサイ人の質問にまったく同調するような立場を採っていたのです。すると、主イエスがここで語られた夫婦の平等性、夫婦の一体性は、彼らにとって堪え難い重みをもつてのしかかってくるに違いありません。男性優位の社会にどっぷりと浸かっていた彼らは、嫌になれば妻を離縁できる権利を手放したくはなかった。主イエスの教えをまともに受け取るならば、妻が自分に対して何をしたとしても、夫婦関係がどんなに悪くなったとしても、離婚は認められないこととなります。

ここに生じてしまった、主イエスの本来の意図と弟子たちの捉え方の間のギャップとは何でしょうか。それは、主イエスが結婚の奥義 (二人の人間が一つになるという神秘) を、あくまでも神からの賜物、祝福として語ったのに対し、弟子たちはそれに伴うリスクにばかりに目をやってしまったということです。ここに、しばしば生ずる御言葉を語る側と聞く側の間の溝があります。私自身にもあり得ることですが、メッセージを聞く側に立った時、語る人が本来意図していることを捉え違えてしまうことがあるのです。主イエスは結婚を神からの大いなる恵みとして語られた。男女が互いに愛し合うことが、神の創造の御業を完成させていくという神秘を教えられた。一方、弟子たちは男性の我意に執着し、損得勘定でのみ考えた。つまり、福音を福音として聞けなかったのです。

私たちが地上の生活で築き上げてきた価値観と聖書の真理がぶつかり合う瞬間があります。とても受け入れ難いと感じるとき、私たちはへりくだって自分自身を御言葉に合わせるということが求められるのです。

## 本論 2. 独身の賜物

しかし、イエスは言われた。「そのことばは、だれでも受け入れることができるわけではありません。ただ、それが許されている者だけができます。」(19:11)

この節で解釈が難しいのは、「そのことば」が何を指すのかという問題です。二つの可能性があります。

①10節の弟子たちの言葉（結婚しない方がまし）と捉える

→「独身を通す」ことが誰にでもできることではないという意味になる。

②4～9節の主イエスの言葉（夫婦は一体であるから離婚は不可能）と捉える

→「夫婦一体を貫き通す」ことが誰にでもできることではないという意味になる。

多くの注解書に目を通していくうちに、私の中でも混乱が生じてきました。そういう時はテキストそのものを自分の目によく読むことが最終的に重要になります。結論としまして、11～12節で「独身」に関する話題に展開していくことを考えると、①の解釈が妥当と思われます。つまり、主イエスは独身で生きていくことこそ、誰にでもできることではなく、そのための召命が与えられなくてはならないと言っておられるのです。実際、第一世紀のユダヤ社会においては、結婚しない人は極めて少なかった。主イエス、バプテスマのヨハネ、恐らくパウロも独身を通しましたが、これは決意と召命なくしては全うできないことだったのです。

前にもふれましたが、戦後日本の婚姻件数は1972年に最高の1,099,984件を記録し、その後2016年には620,531件まで落ち込んできています。生涯未婚率は、2015年の時点で男性24.2%、女性14.9%。男性の4人に1人、女性の7人に1人という割合になります。18～35歳の未婚男女に聞くと、9割弱が「いずれは結婚するつもり」だと回答しているようです。つまり、純然たる「結婚離れ」が起きている訳ではなく、何かしらの理由によって結婚したくてもできない状況に陥っているケースが多いと考えられます。一般的には次のような理由が指摘されています<sup>1</sup>。

### 【積極的理由】

- ・ まだ若すぎる
- ・ まだ必要性を感じない
- ・ 仕事（学業）に打ち込みたい
- ・ 趣味や娯楽を楽しみたい
- ・ 自由さや気楽さを失いたくない

### 【消極的理由】

- ・ 適当な相手に巡り会わない
- ・ 異性とうまく付き合えない
- ・ 結婚資金が足りない
- ・ 住居の目処が立たない
- ・ 親や周囲が同意しない

<sup>1</sup> [http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/chapter1.html](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/chapter1.html)

教会として「結婚」「独身」をどう捉え、どう取り組んでいくかは、現代日本にあって避けて通れない課題です。上記の理由は、確かに現実問題を浮き彫りにして、看過できない事柄であります。しかし、それ以上に「結婚」「独身」に関する根源的な理解が欠けてはいないか。いずれの道を選択するにしても十分な理解をもって臨まなくてはならないでしょう。自分は何のために結婚するのか。何のために独身でいるのか。それぞれにどのような尊い目的があるのか。今こそ聖書の真理が必要とされているのです。

### 本論 3. 既婚者、独身者それぞれに与えられた使命

「というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい。」(19:12)

ここに、独身を通す三種類の人々が挙げられています。

第一に「生まれついた独身者」。すなわち、何らかの先天的な障害を持っている人。それだけではなく、高い芸術性を持った人が心理的に結婚をまったく望まないということもあります。これなども一種の「生まれついた独身者」と言えるのかも知れません。

第二に「人から独身者にさせられた者」。すなわち、宮廷に仕える宦官のように、去勢された人のことです。女官に仕える場合、悪いことができないように去勢されるケースが稀にありました。イスラエルでは、そのような立場の人は祭司になることができず(レビ 21:20)、共同体に参加することさえできませんでした(申命 23:1)。『カストラート』という映画では、天性の声を維持させるために、兄が弟を、弟が知らぬ間に去勢するというストーリーが描かれています。

第三に「天の御国のために、自分から独身者になった者」。すなわち、主の働きに専心するために結婚の道を放棄した人のことです。ここでの「独身者」という言葉は原語では「去勢された人」を意味しますが、これは比喩として言われています。教会教父オリゲネスは自ら去勢したと言われますが、そのような道を選択することが勧められている訳ではありません。パウロが独身について積極的に語っている箇所があります。

- ・ 私の願うところは、すべての人が私のようなことです。しかし、ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります。次に、結婚していない男とやもめの女に言いますが、私のようにしていただけるなら、それがよいのです。

(I コリント 7:7-8)

- ・ 現在の危急のときには、男はそのままの状態にとどまるのがよいと思います。

(I コリント 7:26)

- ・あなたがたが思い煩わないことを私は望んでいます。独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。しかし、結婚した男は、どうしたら妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、心が分かれるのです。独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうしたら夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。ですが、私がこう言っているのは、あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているものではありません。むしろあなたがたが秩序ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるためなのです。（I コリント7:32-35）

主イエスのために積極的に独身の道を選び取って行く人は、救われた感謝に溢れ、この世の特定の責任に囚われず、主の如何なる号令にも直ちに従っていきやすいでしょう。既婚者は常に家族を引き連れて行かなくてはなりません。その意味で動ける範囲に制限がかかることが多いのです。

一方、既婚者には既婚者としての召命があります。恐らくそれは、夫婦という枠組みができるところで広がりをもっていく人間関係でしょう。多くの夫婦問題がある世に、クリスチャンとしての夫婦のあり方を証ししていくことができます。19章の当初の話題に帰っていくならば、主イエスはもちろん結婚に置かれた神の目的を重要視しておられるでしょう。それと同時に、ご自身が独身を貫かれたように、そのような献身の道をも祝福しておられるのです。

## 【結論】

現代の日本の婚姻事情は、教会内の問題ともつながっています。いずれにしましても、私たちは独身の賜物を持つ人に、「周囲がこうだから」とか「体裁上」の理由で結婚を押し付けることには気をつけなくてはなりません。その人自身が主からどのような召命をいただいているかが重要なのです。

「結婚するように召されていることは、独身に召されていることより優れているわけではありません。既婚者であろうと独身者であろうと、本当の幸せとは結婚にあるのではなく、神との正しい関係を築くことにあります。」<sup>1)</sup>

結婚を求めている人は、結婚の本義をよく理解し、生涯切れることのない夫婦の関係を目指し、二人で主に仕える道を祈り求めていただきたいと願います。そして、既に結婚している人は、今あるところを大切に、精一杯主に仕え、家族を愛し抜く人生を歩んでいただきたいと願います。

いずれの道も積極的な主の道であるべきでしょう。一人一人が主の召命に耳を澄ませながら、人生を選択することができますように。

## 【祈り】

人それぞれの人生に目的を置き、それに伴う賜物を与え給う、天の父なる神様。すべての人の生き方に神の意思が置かれていることを覚え、御名を崇めます。独身者も既婚者も、与えられた召命、賜物に従って、忠実にあなたに仕えることができますように。また、結婚を願っている人には、ふさわしい時に、ふさわしい相手とめぐり合わせてください。いずれの道であったとしても、一人一人が自分に与えられた人生を大切にし、あなたを愛する生き方ができるよう、お助けください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

各々の人生に目的を置き、その生きるべき道を照らし給う、父なる神の愛。

結婚の本義を語ると共に、独身者にのみ与えられた祝福をも教え給う、主イエス・キリストの恵み。

今ある人生を大切にし、主の召命に忠実に歩ませ給う、聖霊の親しき交わりが、あなた方一同の上に、限りなくあらんことを。

---

<sup>1</sup> デビ・ジョーンズ&ジャッキー・ケンダル著／川端光生訳『貴女を輝かせる10章——独身時代こそ自分を磨くチャンス』イーグループ、2003、p.9